



ハチ高原の貴重植物を守ります

「ミツガシワ」自生地の保護活動を実施

6月6日(木)に、兵庫県ではわずかに残る自生地のひとつであるハチ高原のミツガシワ群生地にて「ミツガシワ」※1の保護活動を実施します。

当日は、養父市(環境推進課・歴史文化財課)など行政が主体となり、ボランティアと連携し植生保護柵の再整備、ミツガシワの成長を阻害する雑草の除去を実施予定です。

※1 環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(VU)絶滅の危険が増大している種(絶滅危惧種)とされており、兵庫県版レッドデータブックでは、希少性からAランクに位置づけられている。

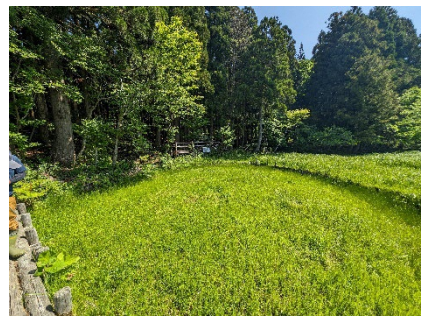
◇ミツガシワの概要については、添付の資料のとおり



△ミツガシワ群生地(5月)雑草が繁茂



△ミツガシワ群生地(5月) 雑草が繁茂



ハチ高原(養父市丹戸)のミツガシワ群生地と呼ばれる湿地は、氷河期の生き残りと言われる植物「ミツガシワ」が自生しています。(兵庫県内では新温泉町とハチ高原のみ)

ミツガシワはミツガシワ科の多年草で湖沼や湿地などの水辺を好みます。ハチ高原では、雪が多く降り気温も低く、冷たい地下水があるなどの好条件が重なり氷期の植物が生き残っていると考えられています。

これまでは但馬の貴重な植物を保護する活動を行うボランティア団体が主体となり、植生保護柵の設置や、水位の維持、雑草の除去などの保護活動をしてきました。

この場所にシカが進入して湿地を踏み荒らす状況が見られ、このままでは植物が絶滅することから植生保護柵を設置していましたが、現在、機能していないことから再整備を行うものです。

当面は、養父市(環境推進課・歴史文化財課など)が主体となり、研究者らボランティアと連携し、ミツガシワの植生回復を目指し保護活動に取り組んでいく方針です。

記

実施予定日:令和6年6月6日(木)

作業行程 :9:30 ミツガシワ群生地で作業開始予定

集合場所 :プラトーこのはな(養父市丹戸 909-1)を過ぎる 位置図を参照のこと

参加者 :養父市(環境推進課・歴史文化財課・新入職員)、ボランティア、地域おこし協力隊

問合せ

○産業環境部 環境推進課長 田中正広 担当者 奥藤 啓(オクトウ ケイ) 電話 079-664-2033

まちの文化財（11）鉢伏高原のミツガシワ

更新日：2024年05月23日



鉢伏高原のミツガシワ



ミツガシワの生育する湿原

ミツガシワは、標高790メートルの清水がそそぐ鉢伏高原の沼地に生育しています。兵庫県下でただ一つの自生地として、昭和57年に兵庫県指定文化財となっています。

湿地は東西90メートル、南北70メートルの規模で、水ゴケなどの植物が泥炭となって、スポンジのような土層を作っています。オタカラコウも生育しています。

ミツガシワはリンドウ科に属する多年草で、関東地方から北側の寒い山地に多い植物です。三枚の葉がカシワの葉に似ていることからミツガシワと言います。高さ20センチメートルほどの小さな植物です。白い花が5月に咲いています。

鉢伏高原では雪が沢山降って気温が低く、冷たい地下水が長く保存されます。こうした良い気象条件が重なって氷河期の植物が生き残ってきました。

しかし水不足による大きな環境の変化で、ミツガシワの生育が弱っています。水深が浅くなり、カサスゲやミゾソバが繁殖しました。水温も高くなって平成10年には10平方メートルまで生育範囲が減少し、絶滅寸前になりました。

そこで南但馬の自然を考える会や関宮町教育委員会が緊急処置として、カサスゲを抜き取って、水深を保つようにしました。その結果、生育範囲が広がってきました。しかしこのままでは、いつか絶滅すると心配されています。

ほかにも養父市には氷河期の植物が自生しています。大屋町加保坂のミズバショウ、氷ノ山の古生沼にあるエゾリンドウなどです。

大山や大峰山など関西には著名な山がありますが、氷河期の植物を守り育てているのは氷ノ山山系だけです。

[次のページ](#)[前のページ](#)

この記事に関するお問い合わせ先

歴史文化財課
〒667-1105
養父市関宮613-6
電話番号：079-661-9042
ファックス番号：079-667-2277
[フォームからお問い合わせをする](#)